

本の紹介

『協同組合社会主義論 大内力語録』



武市 蕭編（こぶし書房、2005年 / B6版 142頁、1400円）

評者 菅野正純（日本労働者協同組合連合会理事長）

東京高齢者生活協同組合監事の武市さんの御尽力によって、大内力先生の、1996年、東京高齢協設立以来の9年間の高齢協との関わり、98年「労協法推進会議」以来の7年間の法制化運動との関わりの中で、先生が話され、書かれたものがまとめられました。

この本を通じて、あらためて、大内先生が、どれだけ深く、広い理論的・思想的な展望の下で、時代に立ち向かう果敢な立場から、また、労働者協同組合と高齢者協同組合への熱い思い入れを込めて、私たちをご指導いただいたかを、認識することができます。

正直申し上げて、「左翼」や「革新勢力」が死語同様になり、無理論・無思想がはびこる現在の風潮の中で、「協同組合社会主義論」という題名に、戦術的な意味でためらいがなかったかと言えば、ウソになります。

しかし、この本を一読いただければ、それを何と呼ぶかは別として、それを欠いたら、協同組合運動が成り立たないほどの、根本的な理念が語られていることがわかります。

資本主義の本性をむき出しに、資本の自己増殖がほしいままに進められ、労働と人間が使い捨てられる時代に、「労働力の商品化という仕組みが、いつまでも存在しているのか」という問題提起は、いま最も鮮明な、アクチュアルな問いかけになっています。

「介護協同組合」に偏している感が否めなかった（そして今も完全には脱却していない）高齢者協同組合の現状に対して、先生が提起された「高齢者自身が主体者となって、地域の総合的な再生を果たしていく、協同組合の根本理念の確立」は、本当に切実な課題です。

(アメリカのイラク侵略と、これに追隨して日本政府が「戦争ができる国家」へと走り始めた現状に対する)「愚行の再来を憂う」という、先生の断固とした警鐘と呼びかけがなければ、東京高齢協のあれだけの規模での反戦平和の取り組みはなかったことでしょう。

大内先生が労協・高齢協に關与していただいた背景には、協同組合運動の転換と人間らしい社会への転換という、先生のより大きな思いがあります。

流通や金融に偏し、事業それ自体を自己目的化し、労働と人間をないがしろにしがちで、協同組合運動の現状を克服し、資本が主体の経済社会から、人間の主体性と共同性に基づく、「協同経済」と「協同社会」を構築することです。

そうした大内先生の提起の中に、協同組合の根源的な再生があるし、未来社会の方向もあると、私もまた確信いたします。

イタリアの協同組合運動を研究した、(ノーベル経済学賞受賞の)アマルティア・センも、協同組合運動に力強く生きている、「参加民主主義」の中に、「継承すべき社会主義の伝統」を見出しています。それは、崩壊した国家主義的な社会主義とは、全く別のものです。

日本ではほとんど知られていませんが、世界の協同組合運動は、いま、経済活動と社会的使命、人間の文化と倫理を結びつけ、グローバル資本主義に対抗する、大きな勢力として成長しつつあります。

私たちも、大内先生の提起を胸に、そうした協同組合本来の方向を切り開くことを誓います。

先生の御健康をお祈りするとともに、今後とも私たちの活動を見守り、お叱りの言葉や御助言をいただけるよう、お願いして、先生への感謝の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

(2005年12月1日、ホテル・ベルクラシックでの「出版記念と大内先生への感謝の集い」における主催者挨拶より)